応募者と家族のための
F. A. Q.

２０２４　年　１０　月
（公社）ＵＷＣ日本協会

１．応募に関して

《Q1-1》なぜ高校２年から２年間なのか。

16 歳からの２年間は、ＵＷＣ創立以来の原則であり、国際バカロレア・ディプロマ課程の要件（注）でもある。寮生活を通じて国際教育を行うことを考えると、柔軟性とともに自立性を備えたこの時期が、最適と思われる。

（注）http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/index.htm を参照

《Q1-2》日本協会の選考時に高校２年生である場合、受験できるか。

ＵＷＣ日本協会では、在籍学年および年齢に関する応募資格を以下のとおりとしている（2025 年度派遣奨学生の場合）

【在籍学年要件】

- ４月に新学期が始まる学校に在籍している場合、2024 年９月時点で、高等学校もしくはこれに準ずる学校の第１学年に在籍しており、かつ一次選考受験時に同じ学年に在籍していること。
- ８、９月に新学期が始まる学校に在籍している場合、2024 年９月現在、国際バカロレア・ディプロマ課程の始まる前の学年に在籍しており、かつ一次選考受験時に同じ学年に在籍していること。
- 国内国際バカロレア認定校の場合は、2024 年 12 月 31 日時点で在籍する学年において、ディプロマ課程を開始していないこと。

【年齢要件】

- 2025 年８月１日時点で、原則、満 16 歳以上であること。

よって、高校２年生は受験の対象外となる。

《Q1-3》現在、日本の高校から海外の高校に交換留学中だが、日本協会が実施する選考を受験できるか。

ＵＷＣ日本協会の募集要項に記載されている応募資格を満たしていれば受験はできるが、日本に一時帰国して、受験することが要件となる。該当学年について確認が必要な場合は、以下の項目を記し、日本協会（uwc@keidanren.or.jp）までメールにて照会してください。

１）氏名（フリガナ）
２）生年月日
３）在籍国名および学校名
４）在籍校の年度始まり時期（●月）※在籍国の学制と異なる場合はその旨を記載
５）留学開始の時期ならびに在籍校での学年
６）復学時期ならびに復学先学年（学校の方針を事前にご確認ください）

《Q1-4》学校長が受験承諾書の発行を許可しない場合、承諾書がなくても応募可能か？また、ＵＷＣ日本協会より学校長に発行をお願いしてもらえるか。

受験承諾書の提出は必須（応募資格条件となっている）であり、承諾書なしの応募はＵＷＣ日本協会では受け付けられない。在籍校には、受験承諾書以外にも成績証明書や学校長の推薦書を記入していただくことになっており、在籍校が受験を認めない場合は、必要な書類の提出が著しく困難になるため、その場合は受験をあきらめていただくことになる。承諾書の代わりに退学を求められる場合についても、その判断は各家庭で判断いただくことになるが、受験のために在籍校を退学してまでも受験することはお薦めしない。なお、ＵＷＣ日本協会から在籍校へ発行のお願いをすることもできない旨ご理解いただきたい。

《Q1-5》受験倍率はどれくらいか。

昨年度（2024 年度派遣生）は 4.7 倍、2023 年度は 6.1 倍、2022 年度は 4.4 倍、2021 年度は 4.3 倍、2020 年度は 4.6 倍だった。応募者数・合格者数等はＵＷＣＮＥＷＳで確認してください。

《Q1-6》日本協会特別支援奨学生の応募者はどれくらいいるのか。

応募者数は年によって変動する。昨年度（2024 年度派遣生）は 7 名が応募し 2 名が最終派遣となった。それ以前の応募および最終派遣者数は、下記のとおり。2023 年度：5 名、2 名。2022 年度：6 名、2 名。2021 年度：6 名、2 名。2020 年度：9 名、3 名。2019 年度：11 名、3 名。

《Q1-7》両親の転勤で幼少期より海外に在住しており、現地校（インターナショナル・スクール等）に通っているが、日本協会の実施する選考を受験できるか。

ＵＷＣ日本協会の募集要項に記載されている応募資格を満たしていれば受験は可能だが、日本に一時帰国して受験することが要件となる。日本協会の一次選考での数学や国語の出題については、日本で初等中等教育を受けていることを想定しているため、長く海外で生活している場合は、国際本部が行う Global Selection Programme、または居住国の国内委員会をとおした受験の検討を勧める。

《Q1-8》国内のインターナショナル・スクールに通っている。英語のみで筆記試験を受けることはできるか。

日本協会の選考は、数学や国語、日本語面接など、主として日本で初等中等教育を受けていることを想定しており、また、一次・二次選考ともに英語のみで受けることはできない。該当者には、国際本部が行う Global Selection Programme 受験の検討を勧める。なお、日本以外の国籍を持つ場合は、該当国の国内委員会をとおした受験も検討してください。

《Q1-9》日本国籍のみを保有し、国内の高校に通っているが、日本協会選考でなく、Global Selection Programme を受験することはできるか。

可能。該当者は、国際本部が実施する選考（Global Selection Programme）を受験することができる。ただし、同一入学年度を対象とした選考に重複応募することはできないため、Global Selection Programme に応募した場合、同一入学年対象の日本協会選考に応募することはできない。

なお、Global Selection Programme 合格者に奨学金が付与されることはなく、全額自己負担となるなど条件に違いがある。詳細は、国際本部のホームページ（https://www.uwc.org/gsp）で確認してください。

なお、Global Selection Programme に関する質問は、日本協会では受けかねるため、直接国際本部に問い合わせてください。

《Q1-10》Global Selection Programme で不合格だった場合、日本協会の選考を受験することはできるか。

できない。受験者は、同一年度の入学を対象とする選考において、重複応募することはできないため、Global Selection Programme に応募した（する予定の）場合、その選考結果に関わらず、日本協会選考への応募は認められない。

《Q1-11》カレッジ奨学金は「ニードベースでの支給」とあるが、どのように決定されるものなのか。

派遣が決まった生徒に対して、カレッジ側が各家庭の経済的負担能力を踏まえて審査し、具体的な支給額を決定し支給するのがニードベース方式である。

選考プロセス過程で提出いただく家計情報の内容についてカレッジ側が審査のうえ、該当年度の全奨学金申請生徒の家計状況を鑑み決定するため、一概にいくらの所得額に応じてどの程度の奨学金が支給されるのか、日本協会で回答することはできかねる。基本的な考え方としては、現在ご家庭が拠出している該当生徒にかかる教育費同等分は最低額としてお支払いいただくことになる。過去の事例では、カレッジ側提示額の奨学金のうち、０％～100％が支給されている。なお、全額カレッジ奨学金枠については 35％～83％の支給となっている。

《Q1-12》同時期の留学を対象とした他団体にも併願可能か。

可能。ただし、二次選考合格後、派遣候補生に指名される段階での辞退は認めていない。辞退の可能性がある者は、遅くとも二次選考前に事務局に連絡してください。

《Q1-13》願書で性別、国籍を問うのはなぜか。選考に影響はあるか。

〈性別〉寮の部屋割など施設上の理由、ならびに在籍生徒構成における Diversity 確保を理由として、性別指定の募集枠が設定されることがあるため。該当枠の選考にあたっては、性別が考慮される。性別指定枠の設定がない年度においては選考への影響はないが、派遣生情報としてカレッジに伝達する必要があるため、募集段階でお伺いしている。

〈国籍〉日本ではＵＷＣ日本協会がＵＷＣへの派遣生の選考を行うように、他国でも同様の機関（国内委員会）が派遣生の選考を行う。各国の国内委員会は一般的に、その国の国籍保有者を選考対象としていることから、他の国内委員会への重複出願を防ぐ必要があるため。日本協会における選考自体への影響はない。

２．選考に関して

《Q2-1》一次選考の形式と出題範囲はどのようなものか。

国語は、選択および記述式で、公立高校１年程度の学習範囲（古文・漢文を除く）から文章読解と国語知識（漢字の書き取りや読み）を問う。数学は記述式で、公立高校１年２学期にまでに履修する数Ｉ分野（「データの分析」を除く）および中学校課程の分野が出題範囲となる。

なお、英語力については、選考試験を行わない代わりに、応募資格の条件として、検定試験の成績証明書の提出を求めている（二次選考において、英語での面接を行う）。応募時に提出する英語検定試験の成績証明書の種類、必要なスコア等については、ＨＰを確認してください。

《Q2-2》一次選考の過去問題は掲載されているのか？

試験（数学のみ）をイメージしていただく参考として「一次選考における過去の使用問題について（参考）」をＨＰに掲載している。

《Q2-3》二次選考の英語面接では、英語力はどの程度必要か？

目安としては英検２級程度だが、カレッジでの生活は、授業も寮生活も原則全て英語で行われるので、流暢とまではいかなくても英会話はある程度できることが望ましい。

《Q2-4》二次選考のグループ・ディスカッションとはどのようなものか？

グループ・ディスカッションでは、一次選考合格者が６～８人程度のグループに分かれて、提示された議題について日本語で討議する。

《Q2-5》選考で重要視されるのはどのような点か？

一次選考では学力、二次選考では面接等を通じＵＷＣのカレッジ生活で必要な素養があるかを判断する。具体的には、異なる環境や困難な状況下でも頑張り抜く強い精神力を有するか、社会に対して広く興味を持ち、学びに対して常に意欲的であるか、コミュニケーション能力が備わっているか、等を確認する。

《Q2-6》選考にむけてどのようなことを準備したらよいか？

日頃から新聞やニュースなどを通じて国内外の時事問題に関心を持ち、自分なりの問題意識を養うことや、ボランティア活動、クラブ活動などを通じて自分の実体験を増やすことなどを心がけると良い。

３．派遣の決定、手続きに関して

《Q3-1》派遣が決定するのはいつごろか？

派遣年の５月～６月頃。日本協会は二次選考に合格した生徒を派遣候補生としてＵＷＣ各カレッジに推薦するが、推薦に伴う書類を提出後、各カレッジが合格（入学）の最終判断をするため、派遣決定時期は上記となる。

《Q3-2》派遣決定後、日本の高校にはいつ頃まで在籍するのか？

派遣生の大半は高校２年生の１学期までは在籍していることが多いが、その後については、各々学校と話し合い、決定することになる。状況変化が発生した際に日本の高校に復学しやすいよう、派遣期間中も籍を残す措置をとってもらった派遣生の例もあるが、在籍継続の要否ならびに可否については、在籍校のご判断となるため、日本協会で回答は持ち合わせない。

《Q3-3》各カレッジに提出する書類やビザの手続きなどは日本協会が行うのか？

日本協会は、一般的な留学斡旋企業ではないので手続きは行っていない。各カレッジの案内に沿って、提出する書類については全て各家庭が準備することになる。また、決定後の派遣先カレッジとの連絡やビザ取得および学費以外のAdditional Costsの送金などについても、各家庭が行う。

４．カレッジでの生活に関して

《Q4-1》買い物は？

文房具、菓子などが買える売店が構内にあるカレッジもある。ない場合でも、日用品はインターネット通販や周辺の商店で手に入るため不自由はない。

《Q4-2》寮生活は？学校の設備は？

寮は、基本的には男女別の階ないし建物に分かれている。各部屋には、異なる国籍・人種の生徒が、２人～５人割り当てられる。基本、日本人同士が同室になることはない。各校とも寮のほか、食堂、講堂、図書室、特別教室などの設備がある。

《Q4-3》衣類は？

日常生活の典型的服装は、ジーパンとＴシャツ。途上国からの留学生も多く、高価なものは不向きである。男子はスーツ、女子はやや正式なワンピースが一着あると便利。着物（浴衣）は必需品ではないが、文化紹介などで着用する機会は多い。

《Q4-4》食事は？アレルギーの対応はあるか？

３食とも、決められた時間に食堂にてセルフ・サービス方式で摂る。メイン・ディッシュは２～３種類から選択するカレッジが多い。カレッジによっては授業時間の間に軽食（クッキーとお茶など）が用意される。

アレルギーについては対応可能なカレッジもあれば、あまり対応が進んでいないカレッジもある。アレルギー反応の軽重に個人差があるため、カレッジの個別具体的な判断が求められる。生活に支障が出ると思われる方は、12月の選考が始まる前に入学先として考えているカレッジに直接メール（各カレッジのＨＰにあるadmission@～等）で問い合わせることを勧める。

《Q4-5》宗教は？

自由。個人の信仰は尊重される。様々な宗教の生徒がいるため、多くのカレッジでスピリチュアルセンターやお祈りをするための場所が用意されている。そのほか、宗教についての討論会や、他の宗教を知る機会などもある。

《Q4-6》夏休みの過ごし方は？

夏休みの期間が２～３カ月ということもあり、大半の生徒が帰国する。留学先国で旅をする生徒や、友人の出身国を訪問する生徒もいる。各校とも生徒が寮に滞在することは認めていないが、ホームステイ先を探してくれる場合や、滞在費を支払えば(あるいは指定された労働を行えば)寮に残ることができるカレッジもある。

《Q4-7》安全面は？

警備員の勤務体制などは、カレッジにより異なる。各校とも比較的安全な地域に所在するが、日本とは治安も異なるため、校内・外の行動おいて自己管理能力は必要となる。

《Q4-8》校内・外での所持品の紛失、盗難などにはどう対応すればいいか？

所持品の管理については自己責任が原則となる。基本的には戻ってこない場合が多く、校内でもいろいろな背景を持つ生徒がいることを認識して、日本とは違う環境であるという意識を常に持つことが求められる。

《Q4-9》アルコールやドラッグの問題に直面したらどうすればよいか？

ＵＷＣの所在国ごとに、飲酒・喫煙やドラッグなどに関する規定・法律また罰則規定は異なるが、ドラッグはもちろんのこと、飲酒・喫煙といった行為は、全てのＵＷＣで原則、校則として禁じられている。校則違反が発覚した場合は、保護者や各国ナショナル・コミッティーに報告や改善要求が送られ、場合によっては退学を含む厳しい罰則が科される。周りの動向には関係なく、言動、行動の全てに自己責任や自己管理能力が求められる。

《Q4-10》病気になった場合のケアは？

看護師および校医の勤務時間や校内在駐状況はカレッジにより異なるが、各校とも緊急時にも対応できる体制を整えている。

《Q4-11》生活面でのトラブルや精神面で問題に直面した場合、校内にカウンセラーなどはいるのか？

カウンセラーが常勤または定期的に学校に来るカレッジもある。担当教員や医務室等に相談することもできる。

《Q4-12》LGBTQ＋への配慮はあるか？

男女混合寮があるカレッジなど、整備されつつある（ただし、使用については手続きやルールを確認する必要がある）が、カレッジにより状況が異なり、日本協会ではすべてのカレッジの詳細を把握していない。

配慮が必要と考えられる際は、個別に日本協会に相談のうえ、12 月の選考が始まる前に入学先として考えているカレッジに直接メール（各カレッジのＨＰにある admission@～）で対応の詳細について、問い合わせてください。

《Q4-13》ハンディキャップ、持病に関する対応はあるか？

カレッジの個別具体的な判断を必要とする案件で、カレッジは個々の生徒のハンディキャップ／持病の状態を精査する必要がある。

対応が必要と考えられる際は、日本協会では判断が難しいため、12 月の選考が始まる前に入学先として考えているカレッジに直接メール（各カレッジのＨＰにある admission@～）で問い合わせてください。

５．カレッジでの勉強・進路に関して

《Q5-1》授業の程度・内容は？

科目によっても異なるが、一般に、主要教科は大学教養課程、補助教科は高校と同程度以上と言われている。作文・実技・実験・レポートなどに重点が置かれる。暗記よりも理解力が問われ、興味のあるものについて深く追求することが求められる。宿題も多く、「人生で最も多忙な２年間だった」と語る卒業生もいる。

《Q5-2》各カレッジの開講科目、ＣＡＳ、施設情報はあるか？

日本協会のＵＷＣ紹介ＨＰ上「ＵＷＣについて＞参考情報」（https://www.jp.uwc.org/reference）にて、国際本部発行の該当資料を掲載している。各情報は資料上記載年度のものとなり、必ずしも毎年度同じ科目・ＣＡＳ・施設設備・進学サポートが提供されることを約束するものではない。（教職員の異動や施設改修工事、支援状況の変化などが起こり得るため。）

《Q5-3》履修科目はいつ決定するのか？

留学前に資料の送付を受けて検討したうえで、留学直後に指導教員と相談し、原則的には９月中に決める。授業開始後一定期間は変更が可能なので、「不向きだ」「ついていけない」という場合には、早いうちに担当教員に相談することをすすめる。

国内、海外大学共に、ＩＢの特定科目やレベルの履修を受験の必須要件とする学部がある（医学部をはじめとする理系学部、経済学部など）。

すでに検討している大学や学部がある場合は、指定要件を各大学のＨＰや教務課などに事前に確認することをすすめる。

《Q5-4》大学への進学は？

日本、アメリカ、ヨーロッパの大学に進む卒業生が多い。詳細は、ＨＰのＵＷＣリーフレットやUWC ＮＥＷＳを参照してください。

進学については、各カレッジの担当教員のほか、卒業生にも相談し、Davis Scholarship などＵＷＣを卒業する生徒を対象にした奨学金制度の内容も確認することをすすめる。

《Q5-5》ＵＷＣを卒業することで、高校卒業資格は得られるか？

- 学校教育法第１条に規定される学校（通称「一条校」）として認可されている日本校を卒業した場合は、日本の高校を卒業したことになる。
- 日本の大学への入学にあたっては、ＩＢ資格保有者は日本の大学入学資格を有する。そのため、別途、高等学校卒業程度認定試験を受験する必要はない。
  参照：日本の大学入学資格：文部科学省が公表する「大学入学資格について」
  https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shikaku/07111314.htm の 10
- 海外の大学の入学資格については、多くの欧米大学はＩＢ資格保有者を対象としている。また、ＩＢディプロマ課程修了者を対象とする大学もある。ご自身が希望する大学に正確な情報を確認してください。

《Q5-6》日本の大学に進学する場合に受験勉強を別途する必要があるか？

ＩＢファイナルのスコアを用いた入試制度を導入している大学・学部は増加傾向にあり、当該制度で受験する場合は、別途受験勉強をする必要はほとんどない。

一方で、志望校がＩＢファイナルスコアを用いた入試制度を導入しておらず、一般受験となる場合には、ＩＢと一般入試では試験形式や重視する点、期待される習熟度が異なるため、別途受験勉強に取り組む必要がある可能性が高く、準備のために予備校へ通った卒業生もいる。また、４月入学の場合は日本の高校在学時の同級生と比べて入学が一年遅れる点にも留意する必要がある。

《Q5-7》派遣生のＩＢ取得率は、どのくらいか？各カレッジのＩＢ平均点は何点か？

日本からの派遣生の９割以上はＩＢを取得している。

国際バカロレアによるとＵＷＣ以外の生徒を含む全体合格率は、コロナ前（～2019 年）がおよそ 70％台後半、2020 年や 21 年がおよそ 80％台後半である。
各カレッジのＩＢ平均点は、日本人以外の生徒も含めた形でカレッジ独自に公開しているところもある。カレッジや実施年によって異なるが、おおよそ 30 点台前半から中ごろといったところである。

以　上